

アイ・ラブ・パリ

松村 茂治

第一話 フランス語の栄光は「レム」

学生時代に読んだある作家のエッセイの中に、印象的な文章があった。その正確な表現は忘れてしまったが、作家がまだ卵の頃、フランス留学に際して入港したマルセイユの売店で、フランス語を使って買い物ができたときの喜びを記したものである。語学学校で、ネイティブの先生とそこの国の言葉でやり取りすることはあっても、それは授業の一環であり、保護された中でのこと、先生は最大限の共感

的理解を持って対応してくれているのである。同じ言葉のやり取りでも、日常的な場面で通じるのは次元が違う。

現地で言葉が通じるかどうか、これは、外国語を学び始めた人なら誰もが抱く期待であり不安である。エッセーを讀んで以来、苦節四十年、その作家の心境を追体験できる時がやってきたのだ。それにしても、港町の売店で買い物をした作家は誰だったろう。辻邦生だったろうか、加賀乙彦だったろうか。

作家の時代とは異なって、わずか十数時間の飛行で彼を地を踏むことが出来るようになったが、この国での第一歩をどんな風に始めるか、つまり、どこで、誰に、どんな言

葉をかけるかという海外旅行開幕の儀式は変わっていない。エコノミーよりは少しゆつたりした座席ではあったが、それでも大柄な私には窮屈で、アルコールの力を借りてもなかなか睡魔は訪れず、眠ったという実感のないうちにパリに着いてしまった。お陰でといつたらいいのだろうか、暗闇で寝返りを打ちながらも、空港警備員に出口を尋ねる場合、売店でサンドイッチを買う場合、両替屋で紙幣を小銭に崩してもらった場合と、いくつかの場面と人物を想定し、こう聞いて、こう答えてきたら、こう切り返してといった具合に、「はじめの一言会話集」とも言うべき場面別の台本を練り上げてきたのだ。

飛行機を降りると、間もなくその機会がやってきた。入国手続きでのやり取りも、台本の中に入れてあった。それを頭の中で繰り返しながら、順番を待ったのである。そして、窓口のお兄さんの合図でカウンターに近づくと、万感の思いを込めて、「こんにちは、パスポートです。」と告げたのだ。お兄さんはパスポートに落としかけていた目をこちらに向けて、おどけたしぐさと茶目つ気たつぷりの表情で「わーっ、フランス語だあ・・・。」と、完璧な日本語で返してきた。もちろん、「この応答は台本にはない。とっさに返事をしなければならないのだが、相手が日本語

を使ったからと言って、こちらが日本語で返したら、何のためにここまで来たのか分からなくなってしまう。気持ちにはマルセイユに降り立った作家の心境なのだから。そこで、これもかねてから用意の汎用性のある、つまり当り障りのないセリフを練り出し、ようやくお兄さんから本場のフランス語を引き出すことに成功し、事なきを得たのである。

短期滞在の旅行者が、現地の人と言葉を交わす機会は、それほどあるものではない。積極的な性格の持ち主なら別だが、買い物と食事のときくらいがせいぜいだろう。それだって、商品棚の品物を指さし、クレジットカードを出してにっこりすれば用は足りるし、メニューを指さして、前菜はこれ、メインはこれ・・・と日本語でも十分通じる。フランス語はおろか、英語も必要ないのだ。

そこで、カフェに入るたびに、ばかばかしいと思いがらも、「私たちは、一人ですが、テラスの席は使えますか？」などと、見ればわかるようなことを敢えて口にし、食事の注文も、正確な発音を誇示するかのようには、指さしてではなく読み上げによって行ってきた。しかし、そうした必死のフランス語作戦にも拘わらず、拍子抜けするような反応が返ってくるが多かった。

カフェのウェイターは、フランス語での注文に対し英語で返してくれることも少なくなかった。こちらのフランス語がたどたどしいのを気の毒に思っ、英語でもいいよという符丁なのかもしれないが・・・いや、あそこの人たちはそうした思いやりの気持ちは持ち合わせているとは思えないので、そうではないだろう。当人が英語圏の出身で、英語以外は面倒くさいというのが本音なのではないか。あるいは、生粋のフランス人でも、世界言語としての英語を認めざるを得なくなってきたということなのかもしれない。パリで数日過ごしたあと、モンサンミッシェルを經由して、ロワール川に沿って点在する古城の見物に出かけたときのことである。朝、駅前の観光案内所に行き、パンフレットを見ながら、一日で四つの城を回るツアーに参加することにしたのだった。定刻に待ち合わせ場所に現れた運転手兼ガイドの男性は、私と同年くらいだったろうか。客は、スロバキアからの親子連れ（大学生くらい姉弟と母親）、イギリスに留学しているらしい中国人のカップル、それに私たち夫婦という、それなりに国際色豊かな取り合わせで、ワンボックスカーの最後部にスロバキア、その前に中国、そして運転席の隣に日本という座席配置になった。車に乗り込むと、ガイド氏は開口一番、「では、今日の

いと思っ・・・」と答えると、「じゃあ、このツアーで練習をすればいい」と受け入れてくれる雰囲気なのを幸いに、彼を、今日一日のプライベートティーチャーと決めたのだった。

こちらがフランス語で話しかければ、返事は原則的にフランス語で返って来るが、ときどき英語になることもある。生粋のフランス人と思われるが、本日の営業は英語モードと決めているために、スウィッチの切り替えがうまくいかないときがあるようだった。話しかけてみて思ったのだが、本人はフランス語をしゃべっているのか英語をしゃべっているのか、ほとんど意識していないのではないだろうか。特にバイリンガルなどと言わなくとも、アルファベットを使っている人たちの間では、こうしたことは珍しいことではないのだろう。どちらの言葉であるかが、話はちゃんとつながっているわけだし、特に、ガイドとしての仕事に關しては、私からの質問に英語で答えていけば、その答えは客全員と共有できるので（私たちが英語を理解できるとして）その方が都合が良いわけだが、こちらとしてはそうとばかりは言っられない事情があった。

こちらの質問に、相手は意識せずに答えてくるが、バイリンガルではない当方としては、意識的にフランス語モ

ガイドは英語で行います！」と宣言したのである。「ええっ！そりゃないよ」と言いたいところだけど、すでに観光案内の窓口でその旨の説明があったのかもしれない。それにうっかり「フランス語で！」などと言っ、「本当にいいんですね?!」と凄まれてもいけないので、素直に受け入れることにした。

流暢な、フランス訛りを感じさせない英語でのガイドが始まり、特にスロバキアの二人は英語に堪能で、しばし後部座席と運転席とで英語が飛び交うような状況になった。中国人ペアも、イギリスに留学中とあって、特に男の子の方は意味がよく取れているようで、連れに通訳をしていた。問題はわが方である。英語で意味が分かるかどうかといった些末なことではなく、ここでフランス語が使えるかどうかということは、この旅の本質に關わる重大な問題なのである。

そこで、ガイド氏の英語はバックグラウンドミュージック程度に聞き流し、運転席の隣なのをいいことに、英語でのガイドが中断した隙を見計らっ、恐る恐るフランス語で話しかけてみたのである。ちよっど驚いたような表情を見せて、「フランス語を話すの?」と聞いてきたので、「学生時代に少しやっただけど、もう少し上手になりました。ドを作り、維持しなければならないのである。これはかなりの努力を要する作業で、おそらく、私の大脳の言語野を生理学実験でやるように染色すれば、トリコロールに染まること間違いなくらいになっていたはずである。そういう状態のところはフランス語で尋ね、フランス語で返さなければ、フランス語モードは維持され、不協和は生じない。たとえうまく言葉が返せなくとも、潜在的には連続性は保たれているといえる。しかし、フランス語で聞いたときに英語で返ってくると、その連続性が途切れてしまうのだ。初めに話しかけたとき、先方の返事に対するこちらの次のセリフまで何となく想定しているのかもしれない。だから、英語で答えが返ってくると、その意味は判っついても、うまく言葉が返せなくなっつしまうことがあるのだ。気持ちが続かなくなっつしてしまうことも言っつたらいのだろうか。そうした経験が何度かあった。ただし、ガイド氏とのやり取りの中で経験した、このフランス語と英語のすれ違いは、もどかしいような感じではあっつたけれど、不快なものではなかつた。

滞在していたホテルでは、チェックインも両替もタクシーを呼んでもらうのも、フランス語で意志を伝えるのが当然と考え、そう努力してきた。浴室にバスローブがないこ

とも、家内がトイレに閉じ込められたことも（後出）、電話で要件を伝え、対処してもらっていたので、そこそこ通じているのだろうと思っていたのである。

ある日、顔なじみになっていたホテルのコンシェルジュに、今日は何処へ行くのかと聞かれ、「まずオルセー美術館に行つてその後で・・・」と言いかけると、「英語でもいいよ」と、一見、助け船を出された形になったのだが、これを助け船と言つてはいけないような気がする。フランスに来て、一生懸命フランス語を使おうとしているところに、英語でもいいよとは、一体どういうことなのだ。それなりの自信を持つて使っていたフランス語だったが、不合格の宣告をされたような気になってしまふ。良い方に解釈すれば、フランス語がこの程度に話せるのだから、英語だったもつと流暢だろうということだったのかもしれないが、とつさの場面ではそんな風には考えられない。

もし、これが逆の立場だったらどうだろう。わが国に来たフランス人が、たどたどしい日本語で話しかけてきたら、私たちは「英語でもいいよ」と言うだろうか。会話のテキストにあるように、「もう少しゆっくりしゃべってください」などと言われなくとも、相手が分かるように、易しい日本語を使つて、根気よく対応をするのではないか。それ

が日本人のおもてなしである。彼らは、英語でもいいよと言うことはあつても、立て板に水のような話し方を改めることはないのではないか。

日本を発つ前、何人もの人から、「どこに行つても、英語で用は足りるよ」と言われたことを思い出す。反対に、「あそこの人たちは、英語で聞いたら、意味が分かつてい たつて、まず答えてくれないよ」という人もいて、できることなら後者であつて欲しいと望んでいたが、前者の意見が正解だった。

フランス語を話す人の数は、フランス本土でおよそ七千万人、全世界のフランス語圏の人を入れてもおよそ二億人に過ぎない。そのフランス語圏の人たちは、ほとんどが母国語を持っていて、フランス語は、学校や官公庁など限られた場所しか使わないのが現状である。英語でもいいよというのは、フランス語の置かれた現状を巧みに表現した言い方だったのかもしれない。それにしても、かつて外国人を大いに悩ませたフランス語使いのあの頑固さが見られなくなるのは寂しい。

フランス人よ、ここはフランスなのだ。もつと自信を持ってフランス語を使おうではないか！

第二話 パリの小娘たち

航空券やホテルのクーポン券、鉄道のパス、旅行保険など、必要な書類についての説明が一通り済んだところで、旅行会社のK氏は、「最後に・・・」と言つて、ホッチキスで綴じた数枚の書類を取り出した。パリの治安に関する書類で、そこには、パリといえども決して安全ではないことが、いくつかの犯行事例とともに記されていた。

そこが必ずしも安全な所でないことは、わが愛読書、荷風の「ふらんす物語」の冒頭にも記されているので、知らないわけではなかった。物語の主人公は、ニューヨークからル・アーブルに向かう船の中で、パリにはスリが多いので、外から容易に手が届くようなところに金品を入れておいてはいけない旨の忠告を受けている。物語は百年前の話であるが、今回の旅行の話をした職場の同僚二人のうち二人とも、地下鉄でスリの被害に遭つたということだから、状況は百年前とあまり変わっていないということなのだろうか。一体、敵はどのような風体、手口で近づいて来るのだろうか。

K氏は、「はじめにお伝えすべきことですが、そうする

と皆さん二の足を踏まれてしまうので・・・でも、それを恐れて旅を見合わせるというのは、もつたいたいと思うのです。パリは魅力的な街ですから・・・」と、申し訳なきそうに説明を始めたのだが、確かに、旅行会社の説明としては絶妙なタイミングでの持ちだし方だったように思う。

「・・・まあ、身体に危害が及ぶようなことは例外中の例外ですが、スリ、ひつたくり、置き引きなどは、日常的なことと思つていてください」と、安心していいの心配すべきなのか、よく分からないのがK氏の結論だった。書類には、「少年・少女のグループが、物売りのふりや、時間や道を尋ねるふりなどをして取り囲み、それを払いのけている隙に、四方からバッグやポケットに手を入れられ・・・」と具体的に書かれているが、実際に経験したことがないので、今ひとつ現実感が湧いてこない。

スリとの遭遇は、意外と早くやつてきた。ホテルに着いて少し遅めの朝食をとり、ホテルの周囲を散歩していたときだった。バンドーム広場、オペラ座、マドレーヌ寺院と、ガイドブックにあるような道順で、つまりパリの目抜き通りを歩いてきて、とある交差点で信号待ちをしていると、私たちに追いついてきた中年の女性が、「英語は判りますか・・・」と話しかけて来たのである。

思わず、「出た！」と身構えたのは言うまでもない。「見知らぬ人に話しかけられても、相手をしてはいけません。一人が注意をひいておいて、別の仲間が鞆やポケットに手を突っ込むから・・・」というK氏の言葉を思い出し、仲間はどこにいるのだろうかというのを気にしながら、「ああ、私、英語、全然だめなんです」と言わんばかりの顔をして目を白黒させていると、夫人は、「判らなかつたらしようがないんだけど、伝えるだけ伝えるからね。向こうの横断歩道にいる女の子たちは、スリだから気をつけた方がいいわよ」と、手に下げた自分の買い物袋に手を入れて、中からモノを引っ張り出すような仕草をしながら教えてくれたのだった。前言を翻すような反応にいささか後ろめたさを感じながら「判ります、判ります。ありがとうございます。あの、ピンクのシャツを着た女の子たちですね・・・」と取り繕ったのだった。私がターゲットにされていたのかどうかは定かではないが、もっぱら中国人や日本人が狙われるということだから、私のズボンの後ろポケットが膨らんでいるのを見つけて、「ほら、あの東洋人のオシリ、膨らんでいるわよ・・・」などというのを耳にして、教えてくれたに違いない。

中学生が高校生ぐらいの、数人の女の子の集団である。

たのだが、高校生くらいと思われる女の子の背負っていたリュックサックのファスナーが開き、中が丸見えになっている。すぐに教えてあげたけれど、手遅れだったのでないだろうか。親子で、かなり深刻な様子で、リュックの中を確かめていた。リュックは、フランス語では「背中につけた鞆」という言い方になるが、ここでは「決して背中に背負ってはいけない鞆」とするのが適切な言い方である。

その日だったか、翌日だったか、「地図」のバリエーションを使った接近があった。間もなくホテルというところまで歩いてきたときである。やはり信号待ちをしていると、数人の女の子の集団が、今度は、文字がいつばいに書かれた紙を広げて近づいてきたのだ。外国人である日本人に、アルファベットの人名か地名を尋ねて来るというのは、地図を持って近づいて来るより不自然な話である。そんな陳腐な手には載らないよと無視してワンプロックほど行くと後ろから、女の子の鋭い悲鳴が聞こえてきた。紙を広げながら私に近づいてきた女の子たちの中の一人が上げた悲鳴だった。きつと、私の次の標的にスリを見抜かれ、さしずめ、「何の証拠があるっていうの！」と逆切れしたのだから。

そして、一番濃厚な接触が、地下鉄の中であった。

スリや盗人が平均的にどのような顔つき、身なりをしているのか知らないが、なかなか外見からは想像できない。ちよつと見には、小奇麗な格好をした、軽快な様子の女の子たちで、予備知識がなければ、話しかけに応じてしまうこと間違いない。こちらが警戒し出したことに気付いたのだろうか、しばらくすると姿を見かけなくなつた。

次の日には、もう少し接近したニアミスがあった。

オペラ座近くのデパートに買い物に行ったときである。交差点で信号を待っているところに、数人の女の子の集団が近づいてきて、そのうちの一人が地図を広げ、道を尋ねて来るような様子なのだ。この手口はK氏から伝授済みである。こちらが地図を覗き込んでいるうちに、仲間がポケットに手を伸ばそうというのであるが、「外国人である日本人に道を聞くというのが、そもそもおかしいでしょう？」というのが、K氏の分かりやすい説明で、日本人に道を聞かれたら、絶対にしないであるう邪険なやり方で振り払い、事なきを得たのだった。

そのすぐ後、ずいぶんと日差しが強いので、デパートに入って、サングラスを買おうとあれこれ試していると、いつやってきたのか、私たちの傍らで、中国人と思しき親子連れが、同じようにサングラスをかけた外したりして

夕方、食事に行くために地下鉄に乗ったときのことである。私たちの後を追うように、数人の女の子たちが乗り込んできた。彼女たちもまた、こぎつぱりとした身なりの、かわいらしい顔つきの娘たちだった。発車間際の駆け込み乗車と思つた妻が場所を譲ろうと脇に寄ろうとすると、その妻の方に体を寄せてくるので、おかしいと思つたのである。私が間に立ちただかるようにすると、閉まりかけたドアから飛び降りるようにして出て行った。一瞬の出来事であった。妻は、ショルダーバッグの他に、口の開いた手提げ袋を持っていたので、それを狙ったのだろう。妻と、「また、小娘たちだ・・・」と言葉を交わしていると、すぐ横に立っていた現地人と思しき老夫婦と目が合った。「・・・そうだよ、危なかつたなあ・・・」とでも言っているようなうなずき方だった。

直接的な交渉があつたわけではないので断言は出来ないのだが、最後の事例を紹介しておこう。これが一番スリリングな出会いだったような気がする。

あと一日、二日でパリを離れようとしている頃だった。一日、歩きつめてホテルの近くまで戻ってきたときである。時刻は七時頃だったろうか、八月のパリの陽はまだずいぶんと高い位置にある。一度部屋に入ると出るのが億劫にな

るので、夕食は途中で食べて行こうということになった。カフェはリボリ通りとそれに丁字で交わる路地の、二つの道路に面していて、店には、大通りからも路地からも出入りできた。路地に面したテーブルに通され、私が路地を背に、妻がその向かい側の席に着いた。

フランス時間としては早かったのだろう、店にはまだそれほど客はなく、案内されたのは四人掛けのテーブルだったので、隣の席にバッグを置くことができたが、ここ数日の経験で、そうした行為が危ないことは十分に学んでいた。私たちの着席と相前後して、中学生くらいの男の子が、出たり入ったりしているのに気づいた。飲み屋に子どもが出入りするのはおかしいので、きっと、この店の関係者の子どもなのだろうと（本当に、日本人は善良だと思ふ）、はじめのうちにはたいして気にも留めていなかった。

そのうち、店の内側から外に向かって席に着いている妻が、私の背後をじっと見つめているので、もしやと思つて、「また、出たのか?・・・」と尋ねると、「誰かを待っているようなそぶりであらぬ方を見ているけど、狙いは私たちね」「さつき、地下に出たり入ったりしている男の子がいたけど、グルカ・・・」「カフェに子どもが出入りするのは変よね」「狙いは、このバッグ・・・」

てみて、意外なことに気がついた。私たちが遭遇したスリたちは、最後の事例を除いてすべて女の子の集団だった。職場の同僚は、男の集団にやられたと言っているのです、先入観を与えてはいけないが、「ふらんす物語」では、スリに「掏摸娘」の文字があてられている。伝統は確実に守られているということなのだ。

第三話 トイレにも「注意あれ

スリにも手を焼いたが、フランス滞在中、一番悩まされたのはトイレである。実際、そこに監禁状態になるという怖い経験もしたが、その顛末については後で話すことにして、この地のトイレの一般事情について、記しておこう。

石畳、石造りのパリの町並みは、確かに雰囲気のある、まさに絵になる佇まいではあるが、住みややすさという点では首を傾げたくなることも少なくない。

シテ島にある裁判所の前を通ったとき、その入り口の石の壁に、自由・平等・博愛の文字が刻まれ、三色旗が掲げられてあったので、国旗の青・白・赤は、自由・平等・博愛を表しているらしいと妻に説明すると、「この街を歩い

日本でもいつもそうするように、空いている隣の座席にシヨルダーバッグを置いたとたん、小娘はそれに手を伸ばし、路地を一目散に走り抜けるに違いない。路地裏に逃げ込まれたら手も足も出ないだろう。女の子が、荷物に手を伸ばす役目だったとすれば、件の男の子にはどんな役割が与えられていたのだろうか。カモを物色して小娘を手引きすること、そして、場合に寄っては小娘の仕事の援護射撃することだろうか。

私たちが一向に膝からバッグを離さないで、諦めたのだろう。妻に促されて振り向くと、私の背後にいた女の子と、店に出たり入ったりしていた男の子を含め、四、五人の子どもたちが騒ぎながらテュイリュール公園の方に立ち去って行くところだった。

店の人だって判っているはずである。空港だろうと地下鉄だろうとデパートだろうと、スリに注意の放送はしょっちゅうある。時々、スリ撲滅大作戦があるとも聞くが、財布を落としても無事持ち主に返ることが珍しくないような国から来た者の目には、真剣に取り組んでいるとは思えない。スリもまた、パリの歴史的な景観の一部として受け入れられていると考えるのが自然なのかもしれない。

先に、荷風の「ふらんす物語」を紹介したが、読み直し

ていて、まず感じるものの出来ないのが博愛よね。」というのが、妻の即座の反応だった。石畳の道は、歴史を感じさせることはあっても、お洒落な靴では歩き難いし、身体の不自由な人にとってはなおさらのことである。実際、妻は指を傷めて靴を一足買う羽目になったし、この街に滞在していた一週間ほどの間に、車椅子を利用して人の姿は一人も見かけることはなかった。

石畳の歩道も、エレベーター、エスカレーターの完備していない地下鉄も、特段の不自由を感じないで過ごして来た私たちが、一番不自由を感じたのはトイレである。街を歩いていて、公衆トイレはほとんど見当たらない。わが国なら、住宅地の中の名もない「子ども広場」にも、トイレは設置されているのが普通である。しかも、かつては目立たないところに置かれていたトイレも、最近は安全性の観点から、通りからよく見える所に置かれている。しかし、ここパリでは、街中の小さな公園はおろか、テュイリュール公園のような名の通った公園でも、誰もが気軽に使えるトイレは見かけないのである。

駅ではどうだったろう。地下鉄の構内にはあったのかも、しれないが、ほとんど目には入らなかった。少なくとも、僕らは一度も使ったことはない。国鉄の大きな駅には、

有料トイレがあるので、もっぱらそれを利用した。あれはどこの駅だったろう。係員のいる有料トイレなら、清潔だろうし安全だろうと思って利用しようとする、係員のお姉さんが急にどこかに見えなくなってしまうということがあった。小心者の日本人としては、タダで入るのははばかれるので、無人の受付のトイレに料金を入れて使わせてもらったが、チャンス到来とばかりに、強行突破する人もいた。用を済ませた後で気づいたことだけど、お姉さんは裏の喫煙所で一服していたのだった。ちょうど、休憩時間にあたっていたのだろう、博愛は感じられなかったが、自由は守られているようだった。

公園に公衆トイレがないと書いたけれど、運が良ければ、無人の有料トイレに行くわすことはある。昔の公衆電話のように、四十〜五十サンチーム（日本円で四、五十円）のコインを入れて使うわけだが、原則的におつりは出ない・・・というより、四十サンチームのトイレで、「つりはいらねえ！」とイキがつて、十サンチームをトイレに捨てる覚悟で五十サンチームコインを使って入ろうとしても、それでは入れないのである。多めに入れば利用はできるが、お釣りは出す全額取られてしまうのと、そういうあくどい商売はしないが、ピッタリでないご利用できないのでは、

良くトイレがあつたので使わせてもらうという手順を尊重したいのである。パリでも、地方都市でも、そのようにやってきた。

トイレについては、数の少なさに加え、もう一つ言っておかねければならないことがある。わが国のデパートのような、人の手の行きとどいた清潔なトイレに慣れている者にとつては、パリのトイレはどこも、つまり、使わせてもらつておいて悪口を言うのも気が引けるが、駅のトイレはもちろん、カフェなどのトイレも、なかなか及第点はつけられない。どう言つたらいいのだろう・・・公共の施設に対する考え方が、わが国とは全く異なっているということなのだろうか。

そうしたなかで、試してみる価値のあるのは、オペラ座の向かいにあるカフェ・ド・ラ・ペのトイレ。ここは、意匠も凝つていて、これがトイレかと思うような造りになっている。私たちは、一階のレストランで食事をしたついでに使わせてもらったのだが、日本に帰つてから、その建物は、オペラ座を設計したガルニエの手になるものだと思つて、なるほどと思つた次第である。もつとも、トイレというより、美術館の一室のような感じの所だから、落ち着いて用が足せるかという、それは別問題である。まあ、つ

どちらが利用者にとつてはありがたいだろう。昔、テレホンカードも十円玉もなく、百円玉を入れてほんの二言、三言話しただけでまるまる全額取られてしまった公衆電話を忌々しく思ったことがあるけれど（N T Tは今でもそういう商売をしていると思うのだが）、使えたことを幸せに思わないといけなかったのかもしれない。ともかく、外でトイレを使うことを想定したら、釣銭が要らないように、多少財布が重くなるのは我慢して、十分な小銭を持ち歩くことが必要である。

電柱の側を通る度に足を上げる犬ほどではないにしても、若い頃に較べたらトイレへの訪問間隔が確実に短くなっている身にとつて、比較的安心できるのは、大きなデパートである。そこなら、確実に、客用のトイレはある。ただし、日本に比べると数は少ないと思うし、探すのに苦労するよ

うな所にあるのが常だった。単に、探し方が悪いだけの話なのかもしれないが。

そういう事情だから、トイレを利用するには、お店に入るしかないのである。普通はカフェで飲み物を注文して、トイレを借りることになる。注文しなくても使えるのかもしれないが、プライドの高い日本人としては、あくまでもトイレを借りるために入ったのではなく、店に入ったら運

いこの間まで、貴族のご婦人たちは、膨らんだスカートのまま庭先に出て用を足したということだし、市民は、夜になると、路地に面した窓から桶に溜めておいた糞尿をぶちまけて流していたというのだから、トイレに対する感覚は、私たちとはかなり異なっているのだと思う。

随分と前置きが長くなってしまったが、雪隠詰めの話をするのが本来の目的であった。

一回目は、ルーブルを見物しているときのことだった。あれだけの広大な建物、一日に、世界各国から何万人もの人が集まる一大施設であるにも拘わらず、トイレの数は少なく、しかも、ようやく見つけたトイレも、極めて奇妙な作りになっていて、何とも利用しにくい。

まず、その設置場所が問題である。展示場から展示場へは、廊下を通つて移動することになるが、見物人がひっきりなしに行き来するその廊下とドア一枚隔てて、便座が置かれていくという状況を想像できるだろうか。しかも、男女兼用である。次の展示場へ行こうとして廊下を歩いていると、何人も人が並んでいるので、重要な展示物があるのだろうと思つてよくよく見ると、そこがトイレだったという具合である。用を足す人しか行かないところで行列を

作っていても違和感はないが、展示場へ移動する人がすぐ脇を通って行くところで列を作るときには、どのような顔をして並んだらいいのだろう。もつともこれはココロの問題だから、周囲の人のことは無視すればすむのかもしれない。おかしなことは、ドアを開けた先にも待っているのである。

通路に面したドアを開けると、六畳ほどもある（いや、もつとあったかもしれない）広い部屋の、ドアから数歩も先に行った所に便座が一つ置いてあるのである。通路のドアを開けたら洗面台があり、その奥にもう一つドアがあって、そこに便座があるのが普通ではないか。部屋の大きさからすれば、十分に複数の個室が取れるはずである。ただでさえ、外では、世界中からのお客さんが行列を作って順番待ちをしているのだ。人が落ち着いて用を足せる広さの限界について研究を行う際には、ここは絶好のフィールドになると思う。もつとも、広すぎて落ち着かないと言っても、それもココロの問題だから百歩譲るとして、通路側からノックをしても、便座に座っていたら、大声を上げる以外、それに応答することができないというのは、物理的な問題である。こういう場合、中から大きな声を上げて（このようなときの世界共通語はあるのだろうか）、人がいる

ことを知らせるべきなのだろうか。黙っていても、鍵をかけておけば、中に人がいて、開けられやしないかとヒヤヒヤしていることを察知してもらえないということなのだろうか。

ここはもともと、城砦や宮殿として使われてきた建物であり、観光客が利用することを想定して建てられたものではない。従って、トイレも、観光客のことを考えて作られてはいないということなのだろう。貴族だったら、お付きのものもいるので、ドアの外からノックをされることを想定する必要はないということなか。

妻が、そうした、常人としては想定外の空間を専有していたときである。八月のルーブルには、世界中から人が集まって来ている。妻は長い時間、さまざまな言葉の飛び交う人の列の後につき、ようやく自分の番を得たのである。妻が入った後にも、何人もの人が並んでいる。しばらくして、中からドアノブを回す気配がしたので、次の番を待っていた人は、ようやく巡って来た自分の番に、緊張を解いたはずである。ドアノブはガタガタ音をたてるばかりで、一向に開かない。「どうした？」「ノブが空回りして、開かないのよ！」「こちらからやってみようか・・・でも、だめだなあ・・・」「係の人を呼ぶしかないか・・・」と、

ドアの向こうとこつちで緊迫したやりとりをする羽目になった。外に出られない妻も困ったろうが、どこの国かわからない外国の人たちに囲まれ、ドアの前で挙動不審を繰り返している私も困ったのである。もちろん、一番困ったのは次の順番の人だったに違いないのだが・・・。ドアを叩いたり、ノブをガチャガチャやったりしているうちに、何かのはずみでカギが外れ、ことなきを得たのだが、あのトイレはその後も、世界中の観光客の目を集めながら、同じことを繰り返したのだろうか。

二回目は、一日美術館を見物して、ホテルへ戻って来たときのことである。夕食に出掛けるにはまだ少し時間があるので、買って来たものを整理したり、トランクの中を片付けたりしているうち、寝入ってしまったらしい。どれくらい時間が経ったのだろうか、ドアをノックする音で我に返ったのだ。ホテルとの交渉は、私の役目ということになっていたので、何か連絡でもあるのかと、部屋のドアを開けてみたが、そこには誰も立っていない。そして、相変わらず、ドアをノックする音が聞こえてくる。そのとき、気づいたのである。部屋の中に妻の姿が見えないことに。そして、ノックの音は、トイレの方から聞こえてくるのである。ドア越しに声をかけると、聞き覚えのある声が返っ

て来る。ドアノブが回らなくなってしまつて、開かないというのだ。外から回そうとしても、状況は変わらない。ルーブルのときは、試行錯誤で何とかなつたけれど、かなり乱暴に試みても、ここでは全く歯が立たない。フロントに電話をして、ボーイさんに来てもらつて、無事解放されたのだが、もし一人で宿泊していたらと考えるとぞつとするのである。

私たちの宿泊したホテルは、最高級ホテルとは言わないまでも、そこそのレベルのホテルで、部屋はかなり広く、ダブルベッドを二つ置いても、その周囲にはかなりのスペースがあり、バス・洗面所で一部屋、トイレは別という造りになっていた。洗面所には、電話機が置いてあつたように記憶しているけれど、むしろトイレにこそ設置すべきと思うのである。

家族や友人と一部屋に泊つてるときには、トイレを使う際には、当然、ドアを開け放してもかまわないし、ましてや施錠は絶対にしてはならないということが、今回の旅で得た重要な教訓だった。

第四話 公共交通機関を利用するということ

準備の段階から、パリでの移動は地下鉄を利用するものと決めていた。ガイドブックには、地下鉄はゾーンに分かれていて、ゾーン内なら一定金額でどこでも行けるし、一定時間以内（九十分だったか？）なら、一枚の切符で何度でも乗り降りできるなどと書いてあるので一見便利そうだけれど、どこまでの切符を買っていいか分からないとき、取りあえず初乗り運賃で乗車しておいて下車駅で乗り越し精算するという、日本国内でなら普通のやり方も、ここでは通用しない（つまり、それは不正乗車と見なされ、罰金に該当するような支払いを求められる）とも書いてある。慣れてしまえばどうということはないのだろうが、切符の購入、改札の通過、乗り降り・・・どれをとっても、独自のやり方があり、おまけに、パリの地下鉄はスリの格好の稼ぎ場となっているなどと言われると、やっぱり止めておこうかという気分になってしまう。

しかしながら、町や人を身近に感じたいというなら、公共交通機関を使うに越したことはない。おまけに、パリは地下鉄網が発達していて、どこにいても、五分も歩けば地

下鉄入口にたどり着くことができる。地下鉄網と言ったが、駅と駅の間隔が短い上に乗り換え駅が多く、東京の地下鉄よりも網の目はずっと小さいように感じた。ただし、地下道を歩く度に、その臭いが気になった。それも歴史のうちだと言われれば、うなづかざるをえないが、我が国の地下街に慣れている者の目と鼻には、いささか刺激的であった。

改札はすべて自動になっていて、利用者は、キップを所定の穴に通し、一人ずつバーを押し開けて通過していくので、これは問題なさそうだ。問題はキップの買い方である。自動券売機に所定の金額を投入して購入するらしいことは理解できるが、パリには一週間以上滞在する予定なので、かなり格安という評判の回数券が欲しいのである。しかし、その買い方・使い方がよく分からない。回数券のことをフランス語では「カルネ」と言うらしいが、「カルネ」には手帳という意味があるので（というより、カルネに手帳以外の意味のあることを知らなかった）、一体、手帳はどうやって自動改札口に通すのか、しばらく他の客の様子を見ていたのだけれど、手帳を使っているような客はいそうにない。警察手帳よろしく、駅員に見せるのかとも思ったが、駅員の姿などどこにも見当たらない。もつとも、駅

員に見せるのだったら、それは定期券であって回数券ではない・・・などと自問自答を繰り返していたが、いつまでもそうしても埒は開かないので、思い切って「カルネ」を買うべく試してみると、何のことはない、どさっと手帳が出て来る訳ではなく、一枚ずつバラになった切符が十数枚、トランプが配られるように出てきたのである。

キップさえ手に入れれば、あとは簡単なはずである。それを改札機に通し、バーを押し開ければその先がホームだから、来た電車に乗ればよいのだが、そこでまた、はたと足が止まってしまう。暗闇から車体を軋ませながら現れる地下の帝王の姿に見とれていると、信じられない光景が目飛び込んで来たのだ。スピードを落とさず、間もなく停車というところで、まだ完全に停まりきっていない車輛のドアが開き、乗客が飛び降りるようにして下車して来るのである。電車が完全に止まったときには、降りる予定の乗客は全員下りてしまっているのではないかと思えるほどである。どうしてそういう芸当が出来るかというと、乗車するにしろ下車するにしろ、ドアを開けるのは利用者の仕事となっているからだ。もちろん、利用者が開けるとはいえ、トンネル内を疾走中の車両のドアは開かないようにロックされているだろうから、電車が完全に停車する少し前に、

運転手がロックを解除しているに違いない。運転手と乗客との絶妙のコンビネーションと言えば、そう言えなくもないが、日本では絶対にあり得ない光景である。そして、ドアを開めるのは運転手の仕事なのだが、これもまた、わが国の基準からは考えられないような技術を駆使する仕事となっている。発車の合図もアナウンスもなく、乗客のことなどこれっぽっちも考えることなく（と、私たちには見えてしまうのだが）、勝手にドアが閉まり、次の駅へ向けての疾走が始まる。これでよく事故が起きないと思う日本人は、私だけではないだろう。

日本の鉄道では、黄色い線より内側を歩け、駆け込み乗車はするな、七人掛けの座席には七人座れ、携帯での通話はするな、イヤホンの音漏れに注意しろ、痴漢は犯罪である等々、やかましいと思う位のアナウンスが常であるが、それが懐かしくさえ思えてくる。この全てをアナウンスしるとは言わないが、せめて、「この車両にはスリが最低でも四、五人は乗っている」くらいのアナウンスはあってもバチは当たらないと思うのである。

すべての路線でそうなのかわからないが、私たちの乗った地下鉄は、どれもワンマンカーだった。車掌がない訳だから、細かいところまで注意が行き届かないのはやむを

得ないが、わが国の地下鉄も、ほとんどワンマン運行になったのではなかったか。ゆりかもめなど、運転手さえ乗っていないが、いや、それだからこそというべきか、かなり丁寧な運行をしているように思う。余計なお世話だが、パリの地下鉄の運転手がわが国の地下鉄の運転手に応募してきたとしたら、実技試験をパスする人はまずいないのではないかと思う。それとも、わが国の運転手が、パリの地下鉄の運転手試験に挑戦したら、悠長な運転をするからと、不合格点をつけられることになるのだろうか。

そうした危険と隣り合わせのような地下鉄利用では大過なく過ごしてきたが、意外な落とし穴が、のんびりとした田舎町で我らを待っていた。

その日は、午前中に、モンサンミッシェルを見物して、午後、次の宿泊地のトゥールまで移動するという予定になっていた。最寄り駅のポントルソンからトゥールまで、鉄道で三、四百キロはあるだろうか。夕食は向こうに着いてから取るようにしたかったし、決して交通の便が良い訳ではないので、列車の乗り継ぎだけは確認しておきたかった。モンサンミッシェルは世界遺産としては世界的に有名だが、ポントルソン駅に停まる列車は日に数本しかなく、

来た列車に乗ればいいという訳にはいかないのだ。路線バスも列車に合わせたの運行だろうから、一台乗り損なうと、悲惨な状況になること間違いなし。

ポントルソン駅の時刻表は、前日のうちに手に入れてあったので、乗り継ぎのいいバスの時刻を確認すればよかった。朝のうちに、ホテル近くのバス停まで行ってみると、時刻表が貼ってあって、一日に数本という厳しい運行ではあったが、こちらの予定とうまく合うバスがすぐに見つかった。

モンサンミッシェルの見物を済ませ、バス停前の食堂でフルーツジュースとフランスパンのサンドウィッチという、今回の旅ですっかりなじみになった昼食を取った。あとは特にやることもないので、早めにバス停に行って待つことにした。しばらくすると、今、山から下りてきたばかりと、いったいでたちのおじさんがやってきて、背負っていたリュックを置いた。バックパッカー旅行の最中なのだろう。ポントルソン行き時刻表を見ていたようだから、私たちと同じバスを待っているのだろうかと思った。

世界遺産の地だけあって、ひっきりなしにバスが発着している。観光バスもあるし路線バスもある。遠くに路線バスらしき姿を見つけると、近づくと、じつとその行き先

表示に目を凝らすのだが、なかなか目当てのバスはやってこない。それでも、定刻までは余裕を持って見送ることができていたけれど、それを過ぎると急に不安になってくる。時計と時刻表に交互に目をやり、彼方に見えていた路線バスが近づいたたびに期待が裏切られることを確認し、次第に焦りを募らせてゆく当方とは対照的に、件のおじさんは、悠然としているのが気になるのである。急ぐ旅ではないので、来たバスに乗ればそれでいいと考えているのだろうか、リュックの中には生活必需品が詰まっているので、どこでも寝泊まりできるということなのだろうか。

何度時刻表を確認しても、駅行きのバスの時刻に間違いはない。すでにそれを、十五分、二十分と過ぎていくのだ。リュックのおじさんにそのことを告げても、へえ、そんなバスがあったのかという頼りない返事しか返ってこない。どうも、私たちと同じバスを待っているのではないようだった。

何回、時刻表に目を遣ったことだろう。突然、重大なことに気がついた。バスは来ないはずだった。時刻表が二段になっていて、それまで見ていたのは、休日ダイヤだったのだ。旅に出たしまえば、その日が休日かどうかなど、気にかけることはまずないだろう。この日が、国民の休日と

いう可能性がないではないが、日曜日である可能性はなかった。平日ダイヤを見ると、前のバスは、私たちがバス停に立つ少し前に出てしまっていて、次のバスはしばらくやってこないのだった。それだと乗り継ぎが悪く、駅でさらに一時間以上待たなければならぬ。タクシー利用を考えると、宿泊していたホテルのフロントに聞きに行ってみると、環境保護の観点からか、車の進入には制限がかけられていて、タクシーは入ってこれないということだった。

定刻通りやって来た悲惨なバスに乗って駅に着いてみると、窓口には、駅長兼駅員といった感じの女の子が一人いるだけだった。トゥールへの最速のアクセスを尋ねてみると、途中駅のル・マンからTGV（フランスの新幹線）を利用するのがいいとのことだったが、それを使っても、トゥール到着は夜中の十時になってしまうという。

時刻表の見間違いから、ずいぶんと時間を無駄にする羽目になってしまったが、そのお陰で、貴重な経験ができた。ル・マンでのTGVへの乗り換えには一時間近い間があり、ずいぶんと遅い到着となってしまうのが心配になって、そうする必要あるのかどうか分からなかったけれど、トゥールのホテルに電話を入れておくことにしたのだ。日本か

ら持つて来た携帯を、フランスで使用できるように調整し、日本との間では連絡がつくようにはなっていたが、フランス広しといえども、この地での知り合いは家内一人しかいないので、フランス国内で使う機会は一度もなかった。

「日本から来たマツムラです。今夜の宿泊予約をしてあるので、バスを間違えて、まだル・マンにいます。そちらへの到着は十時頃になります」と告げると、対応に出た女性は、「トレビアン」と返してくれたのだった。

「トレビアン！」には、「とつても、お上手！」という意味もあるが、この場合は私のフランス語が上手だったという意味ではなく、「判りました」という程度の意味であつたらう。ホテルに着いたとき、フロントには女性スタッフの姿は見えなかったが、私の電話連絡が言づけられていたのか、夜勤の男性スタッフは、こちらが遠慮するのを制止して、閉まりかけている食堂に行き、夕食の交渉をしてくれたのだった。火を落としてしまったということで、そこでの夕食は出来なかつたが、表通りに出れば、まだ営業中のカフェがあることを教えてくれた。思えば、こういうフランス語に接したくて、この旅に出たのではなかつたか。カフェの場所の説明を聞きながら、マルセイユの港に降り立った作家の心境に近づいたような気がしたのだった。